

堀辰雄『曠野』論

—運命の否定—

はじめに

『曠野』は、昭和十六年十二月に『改造』（第二十三卷二十三号）に発表された。本作は堀辰雄の『かげろふ日記』から始まる古典に題材を求めた系列の最後を飾る作品であり、『今昔物語集』巻三十第四話『中務大輔娘成近江郡司婢語』を素材としている。

物語世界の時代背景としては、律令政治の中央集権国家の下、貴族の家に生まれた男は官位相当制によって宮中または地方において上位の出世を目指す運命にあった。出世のためには妻家の経済的、社会的援助が必要不可欠であり、男女の結婚は妻方の努力をもって維持していた。つまり結婚は「出世させる／出世する」という命題を果たす、貴族社会を共に生きるための手段であり、恋愛感情の有無は重要ではない。だが、物語の「男」と「女」は

山 本 愛 弓

身分の違いから気持ちのズレを引き起こし、離れ離れとなってもなお互いを恋慕しているのである。この恋愛感情の描写が存在するという点に、題材とされる今昔物語とある種の差異が見られる。

従って、堀がそれまでのモダニズムから『曠野』のような古典回帰に至ることは、一見伝統主義への転向に思えるがそうではない。それは単なる古典の現代語訳でなく、彼の手で近代的心理を描き出したモダニズム小説として成り立っているためである。

そこで本論では、その表現を精査しながら、作中に散りばめられたモダニズム、実験的な新しさを見出していく。また本論の底本は、堀辰雄『堀辰雄全集（第二巻）』（筑摩書房 一九九六年八月）とする。

一 女が死に至る経緯

『曠野（阿羅野）』という作品は実は江戸時代中期にも存在していた。これは松尾芭蕉一代の『俳諧七部集』のうちの二集で、「かゝるみ」が最も表れた句集として知られている。堀が本作に『曠野』と名付けるにあたり、この俳諧集に感化されたとは言い切れないであろう。だが、同じ読みと漢字を当てた、かの芭蕉の句集の存在を認知していなかったとは考えにくい。よって近世における曠野という言葉に潜在された背景を探ることで、物語における「女」が死に至る原因を明らかにしたい。

曠野の序

尾陽蓬左樞木堂主人荷兮子、集を編みて名を曠野といふ。何故にこの名ある事を知らず。予遙かに思ひ遣るに、ひととせこの郷に旅寐せしをりをりの言ひ捨て集めて、冬の日といふ。その日影打ち續きて、春の日また世にかがやかす。げにや如月・弥生の空のけしき柳櫻の錦を争ひ、蝶鳥のおのがさまざまなる風情に就きて、いささか實を損ふものもあればにや。糸遊のいと幽かなる心の端の、あるかなきにたどりて、姫百合の何にもつかず、雲雀の大空にはなれて、無景の極まりなき、道芝の道しるべせむと、この野の原の野守りとはな

れるべらし。

元禄二年弥生 芭蕉桃青⁽¹⁾

樞木堂主人荷兮子は芭蕉の弟子、山本荷兮のことを示す。荷兮がこの句集を編集し阿羅野と名付けたが、芭蕉はどうしてこういった名前が付けられたのかを私は知らないと述べている。しかしながら「あら」のという題は、序文中の西行の引用歌「雲雀たつあら野におもふ姫ゆりの何につくともなき心かな」によると推測できる。また、「無景の極まりなき、道芝の道しるべせむと、この野の原の野守りとはなれるべらし」という箇所からは、詩歌の世界における荒野に心を迷わせている人々に対して、この句集によつて「歌の道しるべ」を示そうという荷兮の心意気を芭蕉が説いている。そうすると堀も『曠野』を通して、心迷う人々へ何か指し示そうとしたという可能性がある。これについては後の章で論じることとし、ここでは西行の和歌から読み解いていく。

心性定らまずといふことを題にて、人々詠みけるに

雲雀たつ 荒野に生ふる ひめゆりの 何につくとも なき

心かな（山家集・八六六）

（雲雀飛び立つ荒野に生えている姫百合が揺れているように、

何に頼るということもなく定まらない心であるよ）⁽²⁾

空に高く上がっていく「雲雀」、荒野でひっそりとしている「姫

百合」は、本作品中の出世していく「男」と、落ちぶれていく「女」に当てはまるのではないかと推測し、『新編 国歌大観 第一巻 勅撰集編』（株式会社角川書店 一九八三年二月八日）で用例を索引する。

雲雀を含む和歌

〔ひばり〕あがる山のすその夕暮にわか葉のしばふ春風ぞ吹く

（後二条院御歌・風雅・一三二）

野べにしく草のみどりの末遠み霞を分けて〔ひばり〕おつなり

（花園院御製・新拾遺・一五四二）

〔雲雀〕なく野べのおどろの道分けてあがるを友ときく春もがな

（民部卿為藤・新千載・一六八〇）

片岡の霞もふかき木がくれに朝日まつまの〔雲雀〕なくなり

（後京極摂政前太政大臣・新続古・一八二）

すゑとほきわか葉の芝生打ちなびき〔ひばり〕なくのの春の夕暮

（前中納言定家・玉葉・一一一）

五例のうち、特徴として「野」を含むものが四例、「春」を含む

ものが三例挙げられる。

姫百合を含む和歌

夏の野の茂みにさける〔姫百合〕のしらぬ恋はくるしきものを

（坂上郎女・続後拾・六三三）

こちらは一例のみであるが、雲雀と比較するとやはり「野」を含み、季節としては「夏」が挙げられる。「野」という語は今回の西行の和歌でも「荒野」として登場している。よって「雲雀Ⅱ春」「姫百合Ⅱ夏」と仮定して考察をすすめる。するとまず、それぞれの春、夏という季節の違いは住んでいる世界の違いを表し、「男」と「女」は共に生きることの出来ない運命が暗示されると言えるだろう。そして男と女の生きる二つの世界の狭間がまさに「荒野」なのである。

さらにここで吉野裕子の述べる陰陽五行思想を用いて考察を深める。

陰陽五行思想は約五千年前に成立したという中国古代哲学である。それによれば原初唯一絶対の存在は「混沌」。鶏の卵の中身のようなものである。この混沌の中から、「陰」と「陽」の二つの気が生じた。清澄で明るく軽いこの陽の気は、まず上昇して「天」となり、次に重濁で暗い陰の気は下降して「地」となった。この陰陽の二気は、このように全く相反する性質のものではあるが、元来が同じ根源だから、相反しながらも互いに引き合って、交感交合する。この結果、地上においてはこの陰陽二気の交合から、木・火・土・金・水の五原素、あるいは五気が生じた。

この五元素、あるいは五気は、「相生」「相剋」の関係で「循環」する。この五気の相生・相剋が「五行」であって、陰陽五行という名称の通り、もっとも重要な点である。……(中略)……相生は木火土金水の順で、五元素が順送りに相手を生じていくこと。相剋は、木土水火金の順で、五元素が順送りに相手を剋していくことである。宇宙の森羅万象はプラスの面のみを強調して活動しつづければ必ず破局に見舞われる。一方に必ずマイナスの面が必要である。木火土金水は宇宙森羅万象の象徴であるから、そこに相生・相剋の二面が考えられるのは当然なのである。⁽³⁾

五行説図表 一部抜粋

季節	木	火	土	金	水
春					
夏					
土用					
秋					
冬					

さらに五行説図表とは、宇宙の万象が木火土金水の五気に配当されていることを示す。今回は便宜上、季節のみ取り上げることとする。

ここに先程の「雲雀(男)」「春」「姫百合(女)」「夏」を当てはめると、「春＝木」「夏＝火」となる。吉野は五気の相生と相剋と

いう循環によって、万象の穏当性が保たれると述べた。木と火の関係は「木生火」という相生、つまり木と火を擦り合わせれば火が生まれるように、男の側でなければ女は生きられないというように考えられる。これは男と女が別れることで、女が落ちぶれていき、生きるためには最後、国司となった男に見初められるがまた巡り合うという必然を示している。そして、相剋については「水剋火」という関係を推測する。「水」とは、二人が巡り合う近江(淡海＝水)という地である。水が火を痛めつける、消火するというのは自明の理である。つまりは女が減ぶことは避けようのない道理であるのだ。繰り返すが『曠野』という言葉に潜在された西行の和歌から、季節の違いにより男と女は一緒にいることが出来ない運命であるのに、五行説上の「相生」の関係から無理やり「一緒」になってしまった。しかしながら物語中の世界を穩便に保つ摂理により「相生」が生じれば「相剋」が生じるのが常である。近江(水)で男(木)に引き寄せられた女(火)。女は自らの意思や心などは捨て、ただ生き抜くために「木生火」の相生をしたにも関わらず、「水剋火」によって死に至り滅んでいく必然がここに浮き彫りになったのではないか。

五行思想によって明らかとなった本作の物語世界の摂理・秩序は、結果としてひとりの人間の「生」を奪った。この根源は超自

然力のように思えるが、そうではない。「身分の不相応な」男と女が共存出来ない世界を創り上げたのは、「貴族社会の体制」という人為的な力であることを忘れてはならない。

女の死因について、原典である「中務の大輔の娘、近江の郡司の婢となること」では「女はそれと気づいた時、わが身の不運が思いやられて、きつと恥ずかしさに耐えきれないで、死んでしまったものだろう。」と記述される。これは、かのマズローの「欲求段階説」で示すところの欲求の差異が生じたためであると言い換えられるだろう。①生活維持の欲求②安全の欲求③社会的欲求④尊厳の欲求⑤自己実現の欲求の五段階において、下位の欲求が満たされてはじめて次の欲求を求めるのが人間の行動原則である。本作の最終場面において、女は婢として「生活維持」という最下位の心理状態であった。対して男は国司という確固たる身分を築き「尊厳または自己実現」の高次の段階である。身分の違いは気持ちの違いを引き起こし、女は羞恥のパニック状態となった。婢となったときに「いつそもうかうして婢として誰にも知られずに一生を終へたい」というある種の心の死をも超越するダメージが、いよいよ身体的な死へ導いた。また、男の側からすれば「この世でめぐりあふことの出来た唯一の為合わせ」である女を、自分と再会したがために失ってしまった。つまり自らの手で最愛の人を

殺してしまったとも言え、男の精神が崩壊していく未来を暗示させる。二人が再会してしまったがために生じた混沌に収集をつけるため、一方を死に至らしめ、もう一方の精神を破壊する。こういった摂理を機能させる「貴族社会」の構造は非常に酷である。

ここで本文「一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしさに見つめたがり、だんだん死に顔に變はりだしてゐた」の傍線部に注目したい。「いぶかしい」という語は、何か隠された所に對し、原因を突き止めたがたい不審な気持ちを表す。もちろん前夫と再会してしまった由縁、兵衛佐から国司へという驚異の出世に對する「いぶかしさ」の意味もあるだろう。だが、生きるために運命に従順に耐えてきた自分であるのに、「死ななければならぬ運命」にあることを察知しての「いぶかしさ」とも考えられる。それまではどんな境遇も「受け入れるまま」であつた女が、悲劇の構図に「はじめて」疑問を感じる画期的な場面であるとは言えないだろうか。「開眼」という言葉があるが、これはさとりを開くこと・迷いが解けて真理を会得することという。つまり「何者か」の正体に気づくとともに、微力ながらも最初で最後の「抵抗」を示そうとしたのだ。女の目は、男を見たのではなく、「悲劇を生み出した社会」を睨んだのである。

そうすると『曠野』は『風立ちぬ』以降、堀が追求してきた運

命に従順な女性形象の到達点を示す作品とされるが、どうであろう。本作は必然の運命に女は従順になるより他はなく、最後まで「生」を全うしようと試みるが「運命の作り手」の存在に気付き破壊する救いようのない悲劇である。よってカタルシスのような救いの効果はないのである。恋愛が成り立つためには条件が存在し、原典の今昔物語集が成立した中古の時代において、そのひとつは「身分」が相応であることであつた。政略結婚が前提の世において堀は「我々ハ《ロマン》ヲ書カナケレバナラス」という使命の下、近代的な恋愛モラルを描いた。まさにロマンチズム、ブルジョアの俗物性の支配する社会に反発し、自由な表現や空想を重んじた。だが結果として時代の枠が違えば「ロマン」は叶わないと示唆される。これについては作品成立の時代情勢と合わせて後に再度考察する。

二 「六の宮の姫君」との比較

堀は、自身の大学の卒業論文で『六の宮の姫君』について「僕はこの作品を彼の前期の藝術の最も完成されたものであると信じる。」と述べており、小澤保博は『曠野』は「今昔物語卷三十、中務大輔成近江司婢語」によって成った王朝小説であるが、内容的には同じ「今昔物語」に材を得た芥川の『六の宮の姫君』との類

似を示していると指摘している。⁽⁶⁾ こちらの方は卷十九、「六宮姫君夫出家語」によったものである。つまり本作は、師芥川の『六の宮の姫君』を下敷きに書かれたと推測できる。(これより『六の宮の姫君』の底本は、芥川龍之介『芥川龍之介全集(第9巻)』トロツコ・六の宮の姫君(岩波書店 一九九六年七月八日)とする。)

第一の違いとしては娘の表記が異なることである。『曠野』では「娘」「女」と表記され、父の身分はさほど変わらないにもかかわらず『六の宮の姫君』では一貫して「姫君」と表記されている。「六の宮」「姫君」という表記から、『六の宮の姫君』の「姫君」は皇族の人物である。対して『曠野』の「女」はその表記と対をなし、皇族ではなく貴族であると考えられる。よって平安時代、摂関政治で政權を掌握し、実際に政治を動かしていた藤原家の人物である可能性が高いだろう。天皇家から藤原家に主人公を移す、という行為は「天皇賛美」を行わない姿勢であるという見方も出来ない。万世一系の天皇制といった『曠野』発表当時の日本の国家体制、言い換えれば極右思想・国粹主義的な考えには同意しないといった意味を内包する可能性を指摘しておきたい。

次に、結末部の類似点と相違点について比較する。

『六の宮の姫君』

姫君は男に抱かれたまま、細ぼそと仏名を唱えだした。

……(中略)……男や乳母は涙を呑みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌したまま、姫君の念仏を扶けていた。そういう声の雨に交る中に、破れ簾を敷いた姫君は、だんだん死に顔に変わって行つた。……

『曠野』

しかし女は苦しさうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしさうに見つめたがり、だんだん死顔に變りだしてゐた。……

娘の最期に類似する表現を用いていることから、『曠野』は芥川の『六の宮の姫君』を下敷きに描かれたということが明らかである。結末部で大きく異なる点は『六の宮の姫君』には姫君の死では終わらず、原典の『今昔物語』の巻十九の第五には無い、芥川による独創の箇所が見られる点である。

『六の宮の姫君』(数日後、朱雀門に通りかかった侍と乞食法師の会話の場面)

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」

しかし侍は返事もせず、法師の顔を覗きこんだ。と思うと驚いたように、そのうへいきなり両手をついた。

「内記の上人ではございませんか?どうしてまたこのような

所に――」

在俗の名は慶滋の保胤、世に内記の上人というのは、空也上人の弟子の中にも、やん事ない高德の沙門だった。

慶滋保胤は「日本往生極楽記」「池亭記」などの著者として知られる人物である。これを踏まえると、姫君は宿命のせんなさに打ちひしがれるが、最後は極楽往生を果たすであろうという「救い」が描かれている。一方、前節において述べたように、『曠野』は必然の運命に女は従順になるより他はなく、最後まで「生」を全うしようと試みるが「運命の作り手」の存在に気付き破滅する救いようのない悲劇である。両者は対照的である。『六の宮の姫君』には読者に対し、アリストテレスが提唱したカタルシス、つまり人々が悲劇を好む目的とされる「苦しみの感情の浄化」を達成するが、『曠野』にはその効果はないのである。これはまさに究極の悲劇と呼べるであろう。

そしてさらに、娘の心情描写の違いを分析していく。

『六の宮の姫君』

① 姫君は忍び音に泣き始めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮らしを扶けるために、体を売るのも同様だった。勿論それも世の中には、多いという事は承知していた。が、現在そうなつて見ると、悲しさはまた格別だった。姫君は乳

母と向き合ったまま、葛の葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顔にしていた。……………

② 姫君も勿論この男に、悪い心は持たなかった。時には頼もしいと思う事もあった。が、蝶鳥の几帳を立てた陰に、燈台の光を眩しがりながら、男と二人むつびあう時にも、嬉しいとは一夜も思わなかった。

③ 姫君はもう泣き伏していた。たとい恋しいとは思わぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には尽せない悲しさだった。

『今昔物語 卷第十五』

その後、乳母は再々男からの便りを取り次いだ、姫君は見ようとしないので、乳母は家にいる若い侍女に姫君が書いたと思われるように手紙を書かせては男に渡した。このようなことが何度か重なったので、やがて、男がいつと日を決めて訪れることになり、姫もそうなつてはしかたなく男と契りを結ぶようになった。

以上の記述により、『六の宮の姫君』と原典『今昔物語』卷十九の第五に登場する姫君は、ただ生活のために男と結婚したことが明白である。男を恋い慕うような心情描写は一切見られず、結婚は貴族社会で生きる術でしかないのである。よって中古の時代に

合った、感情を除いた合理的な姿勢である。男を待ち続けている描写はあるものの、『曠野』の娘のような「男に恋い焦がれる心理描写」は見られない。やはり、これまで述べてきたような説話の世界に近代的恋愛モラルを盛り込む、といった試みは堀の創造した「新しさ」であるのだ。

さて、比較の最後として「しあわせ」の表記の違いについて考える。『曠野』では「爲合せ」という言葉が度々使われているが、『六の宮の姫君』では「仕合せ」という表記で用いられている。

『曠野』

① 「あの方さえお爲合せになつてゐて下されば、わたくしは此の儘朽ちてもいい。」さう思ふことの出来た女は、かならずしも、まだ不爲合せではなかった。

② 尼は富感さうに、しかしもう見つけられてしまつては爲方がないやうに、その女の不爲合せな境涯を話してきかせた。郡司の息子はさも同情に耐へないやうに、最後まで熱心に聞いてゐた。

③ いままでの不爲合せな来しかたが自分にさへ忘れ去られてしまつてゐるやうな、——さうして、そこには、自分が横切つてきた境涯だけが、野分のあとの、うら枯れた、見どころのない、曠野のやうにしらじらと残つてゐるばかりで

あつた。「いつそうかうして婢として誰にも知られずに一生を終へたい」——女はいつかさうも考へるやうになつた。

此處に、女は、まづたく不爲合せなものとなつた。

④——さうしてこの不爲合せな女、前の夫を行きずりの男だと思ひ込んで行きずりの男に身をまかせると同じやうな詮らめで身をまかせてゐたこの惨めな女、この女こそこの世で自分のめぐりあふことの出来た唯一の爲合せであることをはじめて悟つたのだつた。

『六の宮の姫君』

この男を頼みに暮らしているのは、まだしも仕合せに違ひなかつた。

以上の記述により「しあわせ」という言葉に対し、芥川龍之介は「仕合せ」、堀辰雄は「爲合せ」という漢字を当てはめていることがわかる。それぞれについて、日本国語大辞典（日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典第二版』二〇〇〇年二月）では次のように挙げられている。

しあわせ【仕合・幸】《名》（「しあわす（爲合）」の連用形の名詞化）

①めぐりあわせ。運命。なりゆき。機会。よい場合にも、悪い場合にも用いる。

②幸運であること。また、そのさま。幸福。

③物事のやり方、または、いきさつ。事の次第。始末。

④人が死ぬこと。不幸、葬式。

しあわす【爲合・仕合】《他サ下二》

①うまくはからつて、ふさわしい状態になるようにする。合うようにする。つじつまをあわせる。うまくやりとおせる。間に合わせる。

②二つの物や事柄をぴったり合うようにする。

辞書を索引すると、通常「爲合」は動詞でしか用いず、「しあわせ」という名詞は「仕合せ」「幸せ」と表記することがわかる。「仕合」は動詞、名詞どちらでも使用できるにも関わらず、なぜ『曠野』では「爲合せ」と表記されているのだろうか。漢字源（藤堂明保編『漢字源』二〇〇七年一月）を引くと、「仕」には、つかえる。身分の高い人のそばにたつて世話するという意味があり、「爲」にはつくる・ある物に手を加えてうまくしあげるといった意味がある。よつて、「仕」は目上の人に仕える・従うといった「受動」を表し、「爲」は作り上げるという意味から派生して、自らの主体的な行動によりしあわせをつくる「能動」を表すと考察できる。

『曠野』の女は男の出世（幸福）のために自ら別れを告げるという、主体的な意思による行動を取った。また男は一夫多妻の社会

であつたにもかかわらず、女の家が破産し相手から別れを告げられるまで側に居た。そして新しい妻を迎えてもなお、心には一人の女性を愛し続けるという選択をしている。つまり「為合せ」という表記の方が、『曠野』という物語に適していると言える。

さらに、先ほどの「為合せ」という動詞の意味を取ると、「うまくはからつて、ふさわしい状態になるようにする。合うようにする」というものがあつた。ふさわしい状態になるようにするための主体的な行動。男と女の行動は、自身らが最善の選択をしていると信じての行動だつた。だが、良かれと思つて行動を選択した男と女は、「為合せ」になつたであらうか。繰り返すが、女は男のためを思つて身を引くが、落ちぶれていき「まつたく不為合せ」になり、最終的に死に至る。男は女と別れ、新しい妻を持ち世渡りを成功させるが、女（男にとつての「唯一の為合せ」）を亡くす。では、なぜ男と女は「為合せ」になれなかつたのか。一方、『六の宮の姫君』における姫君は、このなりゆきにまかせ、受動的な「仕合わせ」を選んだが、最後には極楽往生という真の「幸福」を得たと言えるだろう。両者の対比は非常に皮肉なものである。これは「社会の仕組み」に能動的行動（個人であることを主張）をとれば不幸が、受動的行動（権力者や集団の秩序に従う）をとれば幸福が訪れることを意味する。

三 運命の否定

それでは、作品成立時の近代文学の歴史的背景を分析することとその意義を考察していく。『曠野』は『改造』昭和十六年（一九四一年）十二月号にて発表された。同時期の一九四一年十二月八日、日本軍のマレー半島上陸・ハワイ真珠湾攻撃によつて太平洋戦争が開戦した。そして同年九月、六月より連載が開始された徳田秋声『縮図』は、日本の近代社会の暗さという社会批評を含ませた作品であるため、情報局の意向により中絶させられていた。情報局とは、内閣情報局の略称である。昭和十五年（一九四〇）に外務省情報部・陸軍省情報部・海軍省軍事普及部・内務省警保局図書課を統合して設けられた機関で、第二次世界大戦中、政府の情報活動・宣伝を行なうとともに、新聞・出版・放送・映画などに対する統制をおこなつていく。本作発表の一九四一年は、雑誌の統合など出版物規制が一段と強まった。そして太平洋戦争勃発を契機に、文学者が報道班員としてしきりに外地に渡ることとなり、多くの作家が国家主義に迎合する姿勢を示すことになった。

一九四二年には、情報局が日本文学報国会選定による愛国百人一首を発表する。日本文学報国会とは、太平洋戦争中の昭和十七年（一九四二）内閣情報局の指導により結成された文学者の団体で、

文学を通しての国策の宣伝、戦争協力を目的とした。会長の徳富蘇峰はそのキャリアの発端では平民主義を唱えたが、国家主義に転じ、さらに皇室中心主義を主張するといった、まさに国家に迎合を見せるひとりである。こうして引き続き出版物の整理統合が進み、多くの同人誌が相次いで終刊し、厳重な規制で作家が小説を発表する場が減っていくのである。

一九四三年、『曠野』発表の二年後のこの年、二月に国家総動員法による出版事業令公布、三月には大日本言論報国会が発足する。そして、谷崎潤一郎の『細雪』（中央公論）が連載禁止となる。『細雪』は、言論統制が一層激しくなる中、物語中に贅沢な生活を描いたことが「時局をわきまえない」として掲載中止になったのである。前年に国民精神総動員によって、「欲しがりません、勝つまでは！」が掲げられたように、「贅沢」には敏感な時期であったのだ。戦争に突き進む社会の中で時局に迎合しない作品を書けば、政府によって掲載中止に追いやられる危険性が高かった。この当時、作家らは自身の書きたい作品を発表できなかったのである。

つまり戦時下の作家らは政府によって〈表現の自由〉が奪われていたと言えるであろう。すなわち、「文学者としての幸せ」が政府に奪われていたのである。一方の堀辰雄は、多くの作家が国家主義に迎合する姿勢を示している中で、戦争とは一切関係のない

『曠野』を発表した。堀は書きたい物を書くという文学への姿勢を示し、表現の自由を主張した。『曠野』は、文学者としての幸福を貫いた堀と時局との「静かな戦い」の証であるのだ。

ここで、本作は言論統制下でどういった同時代評価を受けていたのだろうか。河上龍太郎と新井立美の評価を挙げる。

光栄ある日 文藝時評 河上龍太郎『文学界』昭和十七年一月一日

創作で一番立派だと思つたのは「改造」の堀辰雄の「曠野」である。いつもの王朝ものだが、人物の輪郭がはつきりしてをり、しかも日本女性の纖弱さと情の濃さが實に鮮やかに出ている。尤も筋書をなす主人公の運命が少しくまく出来過ぎであるのに難癖をつける人がきつとあるだらうが、私には別に気にならぬ。堀君のものしても佳作の部に属するであらう。

新井立美『新作家』昭和十七年二月十一日

現代の日本文学のありやうとして、大いなる誇りである。このような美しい理念の小説は遺憾乍ら、他にはないのである。いまだに自然主義の小説に汲々としている連中や、浪漫小説のなたるやわきまへもせず、徒らに非難攻撃をしている徒輩が多いのである。もののはれの中にある精神は、平安時代の日本女性の美しき誇りである。⁷⁾

ここで注目したいのは「日本女性の繊弱さ」「平安時代の女性の美しさ」を見出して賛美している点である。これまでの考察により、堀が描いたのは「中古の社会において、近代的思想を持つ人物が登場する」話であり、日本主義の提唱などではない。よって両者は、堀の意図を読み違えていると言えるだろう。もしくは全てを見抜いた上で、あえて揶揄している可能性もある。いずれにせよ、同時代の作家たちに堀の「抵抗」は受け入れられなかったのである。

本作は単に国策に協力しないだけの、純粋な文学ではない。協力に同意しないばかりか、軍国主義を痛烈に批判しているのである。それはまず、本作と『六の宮の姫君』の比較で見出された「社会の仕組み」に能動的行動（＝個人であることを主張）をとれば不幸が、受動的行動（＝権力者や集団の秩序に従う）をとれば幸福が訪れるという構図から説明できる。復唱すると、結婚に恋愛感情は求められない時代に、「近代モラル」という勝手な見識を振りかざせば男女共に破滅に向かい、ことの成り行きにすべてを任せた姫君が幸福とされるのは、死してのち極楽往生を果たすからであった。これらを決定づけるのは物語中に登場する運命であり、本文では「何物か」「何かの物のけ」「何か或強い力」、自分の力でどうすることもできない「運命」の力と表記されている。だが、

その「運命」は、必然が積み重なった「顕在する社会そのもの」であった。比較で述べた内容を当時の時代背景と照らし合わせると、作家は個人の権利として「表現の自由」を作品に描けば言論統制で弾圧され、自身の信念を捨て「軍国主義」を賛美する作品を描けば生き残ることが出来る。さらに発展して『六の宮』の「死して救われる」という構図は、軍国主義を信じ戦死した者は天皇や国のための死であるから救われるとされたことに類似する。そう、「陛下の赤子とならん、御国の基とならん、若者の血を逆流して邪を挫かんと燃えたつのである」⁽⁸⁾といった記述のように。

ここまでの考察により、物語の弱者である「女」は、戦時下の国民のことを暗示してはいないだろうか。「女」は都で貴族として生きていた頃は、雅で格式高い「心」を抱いていた。それはつまり自分の大切にする信念である。だが貴族社会の秩序に従い、婢として落ちぶれ「身分」どころか「自我」をも奪われた。ここに見る「社会」に屈服し、信念を曲げてしまう態度は受動的な「仕合わせ」であり、真の「しあわせ」は能動的な「為合わせ」によってしか実現できないのである。だからこそ、「女」が死に至ることや作家が言論の自由を奪われることに見られる、「為合わせ」を創造するがゆえに、運命によって身が朽ち果ててしまうという世の中は、不条理であるのだ。ここで、堀が親しんだリルケの「常に

われわれの生はわれわれの運命より以上のもの」という主題に表象されるように、堀はある種「運命」の否定をした。運命を創り出す「社会」よりも、自分たちの「生」が尊いという主張があるとも、解釈できるだろう。

おわりに

神田秀夫は説話を「従来通りの方法では生きられなくなった人々の文芸⁽⁹⁾」と述べる。つまり、堀は従来のような言論の自由が消失した軍国主義下の社会において、同じようにどう生きるかを試行錯誤した「説話」を題材にとること、これからの「生」を問うたのである。そして、「生」を考えることは自身の「しあわせ」との対峙であると言えるだろう。

先に俳諧集の『曠野』は、詩歌の荒野に心を迷わせている人々に対して、「歌の道しるべ」を示すという心意気が潜在されると述べた。そうすると堀も『曠野』という作品を通して、戦時下の『曠野』に心を迷わす人々へ向けて、昔のような悲劇を繰り返すのではなく、「戦前かつての自分の信念」を思い起してほしいとの願いを込めたのかもしれない。さすれば、人々の心の内に潜在された「しあわせ」の在り方を選択する契機となるだろうとの思いである。つまり『曠野』が昭和十六年に発表された意義は、堀が作家生

命を懸けて日本国家に「しあわせ」を問うた、ということである。そしてこれが堀自身の選んだ「為合わせ」であつたのだ。咯血を患う病弱な「運命」とも戦いながら彼は筆を執り、人々の悲劇の「運命」のために勇敢に戦った。「運命」は逃れようのないものではあるが、内実はあらゆる必然の重なりであつて人為的である。本作に掲げられた「しあわせ」を問うという行為は、立ちはだかる「運命」と対峙するという関わり方を選ぶことである。まさに『曠野』という作品は、時局に対する挑戦を実践した「新しい」モダニズム小説であるといえるだろう。

注 (1) 荻原蘿月『日本古典全書 俳諧七部集(上)』朝日新聞社 一九五〇年一月

(2) 後藤重郎『新潮日本古典集成 山家集』株式会社新潮社 一九二四年四月 二四三・二四四頁

(3) 吉野裕子『ものと人間の文化史39・狐 陰陽五行と稲荷信仰』財団法人法政大学出版局 一九八〇年六月 六九・七〇頁

(4) 竹内清己『日本の作家100人 堀辰雄—人と文学』勉誠出版株式会社 二〇〇四年二月 二四頁

(5) 堀辰雄著、中村眞一郎編『芥川龍之介論—藝術家としての彼を論ず—』『堀辰雄作品集』筑摩書房 一九八二年

(6) 小澤保博『昭和文学の展望(3) 日本浪漫派の古典回歸序説』『琉球大学教育学部紀要第一部 no.3』一九八一年十二月

(7) 池内輝雄『文藝時評大系 昭和編I 第一八巻 昭和一六年—

昭和十七年『ゆまに書房』二〇〇七年一月 三六五頁

- (8) 金原左門、竹前栄治『昭和史』有斐閣 一九八二年七月 九六頁

- (9) 神田秀夫『日本の説話』筑摩書房 一九五九年四月 六・七頁

参考文献

【テキスト】

- ・堀辰雄『堀辰雄全集〈第二巻〉』筑摩書房 一九九六年八月

- ・芥川龍之介『芥川龍之介全集〈第九巻〉』トロッコ・六の宮の姫君』岩波書店 一九九六年七月

【単行本・論文】

- ・笹山隆『英文文芸論双書―別巻Ⅰ― アリストテレス『詩学』』研究者出版 一九六八年一月

- ・中央公論社『中央公論総目次―創刊号より第一〇〇〇号まで』中央公論社 一九七〇年一月

- ・日本文学研究資料刊行会『日本文学研究資料叢書 堀辰雄』有精堂 一九七一年八月

- ・橋本和夫『近代文学年表』双文社出版 一九八四年四月

- ・猪熊雄治『昭和十年代の堀辰雄―モーリヤック・リルケ等から―』(村松定孝『幻想文学 伝統と近代』双文社出版 一九八九年五月

- ・A. H. マズロー『改訂新版 人間性の心理学』産能大学出版部 一九八七年三月

- ・小町谷照彦『新日本古典文学大系7 拾遺和歌集』株式会社岩波書店 一九九〇年一月

- ・阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男『新編日本古典文学全集』

小学館 一九九四年四月

(二〇一五年度卒業)